

入試改革カルテ

関西学院大学

アドミッションポリシー(全学)

世界を視野におさめ、他者(ひと)への思いやりと社会変革への気概を持ち、高い識見と倫理観を備えて自己を確立し、自らの大きな志を持って行動力を発揮する“Mastery for Service”を体現する世界市民を育成することが関西学院のミッションです。

関西学院大学は、このミッションに共感し、大学での学びや諸活動の中で、自分への挑戦をし続ける意欲にあふれ、さまざまな適性を有する多様な背景をもった学生・生徒を世界のあらゆる地域から受け入れます。

そのために、これまでに培われた確かな基礎学力、活動や経験を通じて身に付けた資質、能力、学ぶ意欲や人間性などを、多様な入試制度により多面的に評価することを基本的な方針としています。



▶1889年創立 ▶全11学部24学科。学生数約24,000人 ▶スクールモットーは“Mastery for Service(奉仕のための練達)” ▶THE世界大学ランキング2016-2017総合順位801+位、THE世界大学ランキング日本版2017総合順位40位。

背景と取り組み

背景	取り組み	指標
①「世界市民」を育成する自学のミッション実現 ②「グローバル・アカデミック・ポート」構想の実現。文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援事業」採択	▶ダブルチャレンジ制度*2の導入 ▶海外協定校との交流拡大 ▶国連・国際機関等へのゲートウェイ創設(学部副専攻「国連・外交プログラム」など) これらの取り組みを踏まえて、グローバル入試、SGH・SSH対象公募推薦入試等を導入	施策を推進するために入試改革を行っている。そのため、入試改革単独では指標を設けていない
APとの整合性	さまざまな適性を有する多様な背景をもった学生・生徒を世界のあらゆる地域から受け入れるために、入試制度の多様化を推進	
多面的・総合的評価	書類審査・筆記審査・面接審査を通じて、学力の3要素を多面的・多面的に評価。それぞれの入試方式で重み付けを変えて評価している	
英語4技能	グローバル入試*3、センター試験利用入試(英語検定試験活用型)で4技能型の外部検定試験のスコアを活用	
入学前教育	総合政策学部・社会科学の一般入試以外の入学予定者には入学前レポートの課題を課している	

プロセスとスケジュール

年度	2012	2013	2014	2015	2016
ステップ	事業採択→入試改革		事業採択→組織改編、入試改革		
学内体制 学内の動き	「グローバル人材育成推進事業(全学推進型)」採択		「スーパーグローバル大学創成支援事業」採択。中期計画の中心に位置付け推進		
入試制度		グローバル入試導入	公募推薦(SGH・SSH向け)入試導入	センター試験利用入試(英語検定試験活用型)を導入	グローバル入試の対象資格試験を拡大

*2 所属学部や専攻の学びである「ホームチャレンジ」に加えて、異なるものとの出会いの場「アウェイチャレンジ」に挑戦するもの
*3 入学後、インターナショナル・プログラムに積極的に取り組むことを希望する生徒や国際的な活躍を将来めざしている生徒を対象とする5種類の入試

How to

「主体性等」の評価

↓汎用性のある尺度・基準づくり

関西学院大学

入学者選抜の中で、生徒の「主体性等」をどのようにして評価するのか。関西学院大学 高大接続センター副長 佐藤真教授に聞いた。

佐藤 真

高大接続センター副長
さとうしん ●1962年生まれ。東北大学大学院教育学研究科博士課程後期課程単位取得退学。兵庫教育大学大学院講師・助教授・教授・学長特別補佐、放送大学大学院客員教授等を経て、2014年関西学院大学教授、2017年より学長特命、兼、高大接続センター副長。専門は、教育学(教育理論、教育方法論、教育評価論、授業研究論)。



2017年3月に「大学入学者選抜改革推進委託事業(主体性等分野)」の一環として関西学院大学で開催された「SGH甲子園」。全国84の高校が参加し、課題研究の成果を発表した。

入試で分断されている 小中高大の教育

日本の学校教育は、小中学校で資質能力を高め、高校で探究心を養い、大学でアクティブ・ラーニングを実践していますが、今は、小中高と大学が入試によって分断されています。入試を変えることで、小中高大の風通しをよくできるのではないかと——そのような問題意識の下、本学では「平成28年度文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業」の代表大学として、*1の連携大学とともに、「主体性等」の多面的・総合的な評価手法の調査研究に取り組み始めました。最終的には、「主体性等」に関する汎用性の高い評価基準表をつくり上げ、各大学がそれぞれAPに基づいて、評価表の一部を抜き出し、入試で活用すること

「主体性等」の評価の 実現に向けた課題

をイメージしています。
「主体性等」の評価については、3つの課題があります。1つ目は、「主体性等」の定義は人によって異なるということ。広く情報を集め、汎用性の高い評価尺度・基準の開発をめざしています。
2つ目は、評価のツールに関することです。「主体性等」は、ある一瞬を切り取って評価できるものではなく、日頃の教育活動の中で見ていくべきものです。そのため、教員や生徒自身が日常的に活動評価を記録でき、転記などの教員の手間がかからないしくみが必要です。「eポートフォリオ」など、ICTの活用は欠かせません。
3つ目は、評価に対する教員と

探究活動のサポートを 通じて評価基準を作成

汎用性のある尺度・基準を作成するために、「主体性等」が発揮される場面とその評価方法に関して広く情報を集めています。情報収集は主に、高校での探究活動のサポートを通して行っています。本学を会場として、今年3月に開催した「SGH甲子園」も、そ

生徒の考え方を考えることです。生徒の日常を評価することが、教員によって生徒を常に「見張る」ことになっては本末転倒でしょう。「主体性等」の評価が、教員にとつては、生徒のよい点を見つけて記録する楽しみな活動として、生徒にとつては、自分の個性をアピールする自己表現の手段として捉えられるような状況をつくることも大切です。

委託事業に取り組みほか、本学 自身もスーパーグローバル大学創 成支援事業を軸とした高大接続・ 入試改革に取り組んでいきます。

の活動の一環です。学校関係者を含めて2000人以上が集うなか、高校生たちは「フェアトレード」「多文化共生」など、1年を通して取り組んできた探究学習の成果を日本語と英語で発表しました。本学と連携大学の大学教員が審査員を務め、各発表の評価と上位チームの表彰を行いました。この審査を通じて、プレゼンテーションにおいて発揮される主体性の評価についての知見を得ることができました。一方で、理系の生徒の場合、実験ノートを黙々とつける中で発揮されるような主体性もあります。さまざまな場面における主体性について、今後も情報を集めていきます。

*1 大阪大学、大阪教育大学、神戸大学、早稲田大学、同志社大学、立命館大学、関西大学